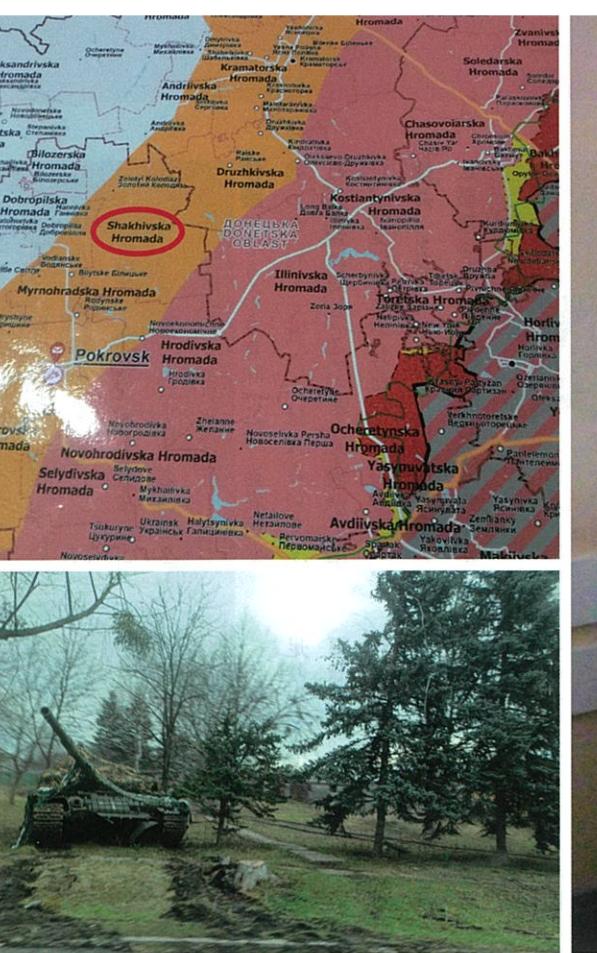


# 世界にいかないと見えないものがある

今回、伊藤隼也は戦禍のウクライナで支援活動を行った国境なき医師団(MSF)の看護師、畠井智行さんを取材。現地の様子や支援の内容、戦争で危機にさらされた人たちへの支援を行った理由について話を聞きました。

※取材は4月下旬に実施。記事で紹介している内容は2022年11月～2023年1月の約3カ月間のもので、現在の活動地域の状況を表しているものではありません。



右：移動してきた産婦人科で産まれた2例目の赤ちゃんと家族（加工しています）。

左上：ウクライナ東部の地図。赤い丸がスラビヤンスク。ドネツク州バフトの西側に位置する人口10万人ほどの街。  
左下：街の中に潜んでいた戦車

ロシアの侵攻から1年あまり現地で活動する人が発する多くの言葉は日々の報道とは異なる「重み」があつた



ミサイルアラートアプリ

伊藤 ウクライナでは畠井さんはどんな活動を行っていたのですか？  
畠井 もともと小児病院の支援で入ったんですが、病院の横に軍の連施設があつてロシアに狙われる可能性が危惧されたので、代わりに街にある別の病院を支援することになりました。具体的には、緊急時の医療活動と、産婦人科病院が総合病院に移った際に不足した物品を含む、全病棟の物質の支援です。

伊藤 スラビヤンスクまでは飛行機で行つたのですか？

伊藤 ウクライナでは畠井さんはどんな活動を行つていたのですか？  
畠井 もともと小児病院の支援で入つたんですが、病院の横に軍の連施設があつてロシアに狙われる可能性が危惧されたので、代わりに街にある別の病院を支援することになりました。具体的には、緊急時の医療活動と、産婦人科病院が総合病院に移った際に不足した物品を含む、全病棟の物質の支援です。

伊藤 スラビヤンスクまでは飛行機で行つたのですか？

伊藤 ウクライナでは、やはり軍事侵攻による負傷者を見ることが多かつたんでしょうか。  
畠井 私もそう予想していたのですが、実際は一般的な外傷、生活習慣病をみると多かったです。レッドゾーンにある病院は軍隊が使用しているため、軍の負傷者はその病院でみることになつていて、逆に、その住人はスラビヤンスクなどのオレンジゾーンの病院に来ていました。

伊藤 なるほど。

畠井 我々がみていたのは、交通事故とか、雪や氷で滑つて転んだとか、階段から落ちたとかでケガをした人や、持病の薬を取りにくくする人、薬を取りに行けなくて持病が悪化した人でしたね。軍事侵攻に関する集団負傷者は週に1件あるかどうか。それも地雷の破片で負傷したとか、落ちてきた弾道ミサイルの破片が家や車を壊し、それでケガをしたとか、軽傷が多かったです。

伊藤 畠井さんは2022年11月から今年1月までの約2カ月間、スラビヤンスクで活動をされていたんですね。先ほどウクライナの地図を見せてもらいましたが、最前線にかなり近い場所で活動されていました。

畠井 戦闘のフロントライン（最前线）から30キロぐらいまでは砲弾が飛んでくるのでレッドゾーンと呼ばれてます。僕らが活動をしていたのは、そこから10キロほど離れたオレンジゾーンにあたる場所です。

伊藤 どんな様子でしたか？

「最前線から40キロの地域で活動 弾道ミサイルが飛んでくる毎日」

畠井 一時期、市民の9割は他の国や地域に避難しましたが、現在は2、3割戻っています。僕らがいたときは比較的静かで、普通のヨーロッパの街と変わらない感じでした。市民も普通の生活を営んでいました。

伊藤 それでも写真を見ると、戦車があつたり、地雷が埋められていることを示すドクロマークがあつたり。破壊された建物もありましたよね。

畠井 制空権はウクライナにあるのでロシアの飛行機は飛んできませんでしたが、ほぼ毎日銃声が聞こえましたし、弾道ミサイルが飛んできました。ミサイルはウクライナ側が防空ミサイルで迎撃しているのです

## 畠井 智行さん

国境なき医師団看護師・薬局責任者

PROFILE

高校卒業後、世界でボランティア活動を各地で行う中、インドで大規模地震に遭遇、医療援助活動にボランティアとして携わり、帰国後看護師となる。調訪赤十字病院、沖縄県立八重山病院での勤務を経て、2013年よりMSFに参加。エボラ出血熱、ネパールや熊本の地震、アフリカ各地での難民・栄養失調プログラム、中東の紛争地など、主に緊急プログラムを中心に参加。



## 「1日1~2件の出産がある 必要なのは電気、発電機を寄付」

伊藤 出産にも関わったのですか？

畠井 はい。ドネツク州の別の都市にある大きな産婦人科病院はロシアにミサイルで狙われているので、多くの妊婦さんは私たちが支援している産婦人科病院に来ていました。口コミで妊婦さんがたくさん集まるようになり、平均で1日1件、多いときで2件、出産がありました。

伊藤 そういう意味では、産科医が残つていてくれたのは大きいですね。物資に関しては、どんな物が不足し、調達が必要でしたか？

畠井 まず、一部の発電所がロシアに破壊されたため、とにかく電気が

残つていてくれたのは大きいですね。物資に関しては、どんな物が不足し、調達が必要でしたか？

畠井 まず、一部の発電所がロシアに破壘されたため、とにかく電気が



左から、病院の外傷外来看護師（ウクライナ人）、MSFの医師（イスラム人）、畠井さん、MSFの通訳（ウクライナ人）



上：地雷で負傷し搬送された市民  
下：小児病院の壁に描かれた絵



上：支援活動中に誕生日を迎えた畠井さん 下：ウクライナの食事。

## 紛争や感染などで医療支援を必要とする地域は少なくない 畠井さんの話は医療者がすべきこと そのヒントがあるように思えた

あれだけの患者さんが亡くなるのを目撃する。自分も感染して死ぬかもしれないというときに、紛争とか戦争とかどうのこうの言つていられないと思つたんです。リミッターが外れた瞬間でした。

「紛争地域で死を覚悟したことと「医療者だから安全」ではない」

伊藤 紛争地域では死を覚悟した？  
畠井 はい。実際、医療者だから安全、というわけではないですからね。

イラクでは行動範囲がほぼ施設内に限られていたので銃撃に遭うことはありませんでしたが、銃撃戦が数キロ先に近づいてきたこともあります。イエメンは空爆が頻繁にあって、実際に近くに落ちてきたので「助かって良かった」「ぐらいの思いです。

伊藤 これからも続けますか？

畠井 もちろんです。今は日本にいるので、状況をみんなに伝えることが役割。活動したいけれど……と躊躇している人のハードルをできるだけ低くできたらと思っています。

伊藤 今回、強く印象に残った「自分ができないことってあるんじやないか」という畠井さんのひと言は、素晴らしい。看護現場に変革が必要であることを示しているのだと思います。

## 伊藤 隼也

(いとう しゅんや)

医療ジャーナリスト・認定NPO法人救急ヘリ病院ネットワーク（HEM-Net）理事・写真家・医療情報研究所代表

profile

患者中心の医療を実現するため医療ジャーナリストとしてテレビや雑誌などのメディアで活動中  
ホームページ shunya-ito.tv



※現地の写真は国境なき医師団提供